

後期における魯迅の民衆像に関するノート（中）

关于鲁迅后期的民众观之札记（中）

中井政喜

Masaki NAKAI

1. はじめに
2. 前期における民衆像
3. 後期における民衆像
 - 3.1 マルクス主義文芸理論から見る民衆像（上）（ここまで前号、第9号）
 - 3.2 後期における現実の民衆像（中）（ここより今号）
 - 3.2.2 後期における特徴的な民衆像（下）（以下次号、予定）
4. さいごに

3. 後期における民衆像

3.2 後期における現実の民衆像

3.2.1 前期から継承発展する部分の後期の民衆像

ここでは、前期の民衆像から継続しつつ変容する後期の民衆像を検討する。

（1）愚民としての民衆像

1928年の「太平歌訣」（1928・4・10、『三閑集』）、「鏟共大観」（1928・4・10、『三閑集』）等において魯迅が描写した民衆の姿は、一つの社会現象として現実存在する民衆像を指摘したものであった。

魯迅は「太平歌訣」で『申報』の記事を引用する。南京に孫文の陵墓が建設され、完成まぢかとなって、石工が幼児の魂を集めて、墓穴をふさぐらしいという噂が、市民の間で広まった。市民は子供の危険を避けるために、歌の文句を書きつけたたすきを子供の肩にかけさせた。三種類あって、例えばその一つの歌の文句は次のようである。「誰かが私の魂を呼ぶのなら、呼んだものが自分で引き受けよ。人を呼んで呼ぶことができないなら、自分で石の墓を受け支えよ。」（「太平歌訣」）

「この三種のうちのどの一種であれ、わずかに二十字〔原文の歌の字数を指す〕であるけれども、市民の見解、すなわち革命政府に対する関係、革命者に対する感情が、すべて余すところなく描きだされている。社会の暗黒を暴露するのが得意な文学者であっても、おそらくこのように簡潔で的確にするものはまれだろう。『人を呼んで呼ぶことができないなら、自分で石の墓を受け支えよ。』これは多くの革命者の伝記と一部の中国革命の歴史を含みこんでいる。」（「太平歌訣」）

「近頃の革命文学者はしばしば特に暗黒を恐れ、暗黒を包み隠す。しかし市民のほうは少しも遠慮せず、自分で現してしまう。あの小利口な機敏さとこの重々しい麻痺とがぶつかりあって、革命文学者にあえて社会現象を正視する勇気をなくさせ、つまらぬことをぺちやくちゃとしゃべらせることになる。かささぎを喜び、ふくろうを憎み嫌い、ただいくらかの吉兆を選んできて、自分を陶醉させ、そこで時代を超えてたつもりである。」（「太平歌訣」）

1928年1月、革命文学論争がはじまり、魯迅は、中国革命文学派における連帯の対象としての民衆についての安易な民衆観を、余りに楽観的な情勢把握を、暗い現実を避けようとする姿勢を、鋭く突いて批判する。

また、魯迅は「鏗共大観」（1928・4・10）で、『申報』『長沙通信』を引用して次のように言う。湖南省で共産党省委員会が摘発検挙され、処刑者30余名にのぼり、黄花節に8名が処刑された。そのとき三体の女性の遺骸と省委員会の首領の首級がさらしものにされた。

「『……この日、刑執行ののち、馬（淑純、16歳、志純、14歳）、傅（鳳君、24歳）の三犯人が女性であるために、全城の男女で見学に出かける者が、終日

黒山の人だかりとなって埋まり〔人山人海、原文〕、混みあって通行がふさがった。また共産党首領の郭亮の首級も局の入り口にかかげられ、見学に行く者はいっそう多かった。』（『鏗共大観』）

「多くの『民衆』は、一続きの人々が北から南へ、一続きが南から北へ、押し合いへし合いし、騒がしく……。さらに蛇足を加えれば、顔にみんな、或いは心を奪われ、或いは満足している表情を浮かべていた。」（『鏗共大観』）

「私は最後に暗黒を少しばかり出しておこう。それは我々中国の現在（現在である！超時代のものではない）の民衆である。実際何党であるかはあまり関係がない、『首』と『女性の死体』を見るのでさえあれば。それが有りさえすれば、誰のものであれ、見る人がいる。拳匪の乱、清末の革命党の獄、民国二年、去年と今年、この短い20年のなかで、私はすでに何度も目にし、耳に聞いた。」（『鏗共大観』）

この二つの文章は、革命文学論争が1928年1月にはじまってまもない4月時点のものであり、魯迅とマルクス主義文芸理論との本格的接触がはじまってから、まだそれほどの期間をへていない時期である。それらは主として、論争相手の中国革命文学派の安易で楽観的な民衆像に対する批判、革命文学者が現実の暗黒の実情から目をふさぐことに対する批判の意味に、重点があったと思われる。このように、現実として存在する民衆の暗黒の一面を、魯迅は事実として存在していることを認識し、改めて指摘し、革命文学派の注意を促したと思われる。この民衆像は、前期の愚民を継承する民衆像として現れているが、しかし前期と同じ意味で注目しているのではなく、その批判の重点は革命文学派の現実把握に対する批判にあったと思われる。

すなわちその後、1929年ころ以降、国民性に関してそれを第一動因ではないとするプレハーノフの指摘に基づき、上記のような社会現象、民衆の階層に現れる国民性の悪を解釈する魯迅の基本的姿勢、位置づけは、変化したと思われる。1929年ころ、魯迅が翻訳したプレハーノフの見解によれば（前述のように）、或る時期或る社会に国民性自体が存在するとしても、しかしその国民性は第一動因ではなく、歴史的諸条件と社会的構造の所産として説明された。ゆえに魯迅が中国人の国民性の悪をそれ自体として取りあげるこ

とは、国民性が問題として現実に存在する以上、後期においても当然ありえた。しかし1929年ころ以降、魯迅は、国民性の問題が第一動因ではなく、歴史的社会的諸条件の産物であるという前提のもとに、国民性の問題を取りあげていると考える。その結果、1929年ころ以降、魯迅が文章中において歴史的社会的諸条件の分析をすることなく、国民性の問題をそれ自体として取りあげることは、前期に比べてはるかに少ないし、たとえあるとしても、それは上述の暗黙の前提のもとに言及されている。後期における国民性のとらえ方は、1929年ころ以降、史的唯物論という新しい思想的枠組みに基づいて考察され、限定されて位置づけられていると思われる。¹ゆえに、1928年4月の「太平歌訣」（1928・4・10）、「鏗共大観」（1928・4・10）は、国民性の悪が民衆階層に具現する前期の愚民像を、中国革命文学派批判に重点を移動したうえで呈示した最末尾の表現であると考ええる。

魯迅は、『『守常全集』題記』（1933・5・29、『南腔北調集』）で次のように言う。

「革命的先駆者の血は、現在ではすでに珍しくなくなった。たんに私自身について言うなら、7年前数人のために〔1926年の三・一八惨案で教え子の女師大学生が殺害されたことを指す〕、少なからず激高した空論を発した。のちに電気刑、銃殺、斬首刑、暗殺の話聞き、神経がだんだんと麻痺して、いささかも驚かず、言う言葉もなくなった。私が思うに、新聞で掲載される『黒山の人だかりとなって埋まり』（人山人海、原文）さらし首を見にいく人々は、おそらく祭りの飾り提灯を見るほどには興奮を感じないだろう。血はあまりにも多く流れた。」（『『守常全集』題記』）

このような、民衆がさらし首を娯楽のように見学する社会現象は、1933年の『『守常全集』題記』を書いた時点において、1928年当時と同じように、事実として存在していたと思われる。しかし1929年ころ以降、そうした行動をとる民衆の精神（国民性の悪を体現する精神、目覚めぬ精神）は、歴史的諸条件と社会的構造の産物であるという前提のもとに観察されていると思われる。また魯迅の批判の矛先は、この場合、電気刑、銃殺等によりあまりにも多くの血を流させた、そのときの政治権力（軍閥統治、南京国民政府）によ

る流血の圧制に、社会的政治的諸条件の方に主として向けられている。

魯迅は「推」（1933・6・8、筆名豊之余、『准風月談』）で次のように言う。
「旧暦の端午に、或る劇場で、火事のデマがおこったために、また人を推した。十数人の力の足りない少年を踏み殺した。死体は空き地にならべられ、聞くとところによると、見にいったものはまた万余の人があり、黒山の人だかりとなって埋まり〔人海人山、原文〕、また人を推した。

推した結果は、口を開けて、言う、『ああ、おもしろいことだ！』（「推」）
「上海に住んでいて、〔外国人と高等華人の〕推したり踏んづけたりに出会わないことは不可能であり、しかもこの推すことと踏みつけることは、なお広がっていくだろう。下等華人のなかのすべての幼者弱者を押し倒そうとし、すべての下等華人を踏みつけようとする。このときには高等華人だけが残って祝いたえる——

『ああ、ほんとうにおもしろいことだ。文化を保全するためには、いかなるものを犠牲としても、愛惜するべきではない——これらのものにどんな重要性があるというのか。』（同上）

ここで、魯迅は死体を見物する黒山の人だかりに言及するけれども、そこから上海の支配者外国人と高等華人の横暴ぶりに一文の話題を収斂していき、ここに批判の矛先を向けていると思われる。

また、「“立此存照”（3）」（『中流』第1巻第3期、1936・10・5、筆名暁角、『且介亭雜文末編』）で次のように言う。

「中国人は決して『自分を知る』明がないのではない。欠点はただ、或る人々が『自分を騙す』ことに安んじて、ここから『人を騙し』たいと考えることにある。たとえば病人が、浮腫を患っているが、しかし病気を隠して治療を嫌う。しかし他人がでたらめで、彼が肥っている、と誤解するように願う。妄想が長くなると、時には自分でも肥っているようで、決して浮腫ではないと考える。たとえ浮腫であっても、特別な良い浮腫であり、みんなとは違うと思う。（中略）私はいまでもスミスの《支那人気質》を訳す人がいるように希望している。これらを見て、自省し、分析し、どの点が正しく言われているのかを理解し、改革し、抵抗し、自ら工夫し、他人の諒解や称賛を求めず

に、結局どのようなものであるのが中国人であるか、を証明するのである。」(「“立此存照”(3)」)

ここではあたかも魯迅が国民性自体を第一動因として論じているように解釈ができる。しかし後期におけるこれまでの経過からして、魯迅は、国民性が歴史的諸条件と社会的構造の所産であることを前提にして、すなわち第一動因ではないことを前提にして、そのうえで現在結果として、社会現象として存在する国民性の問題を取りあげ、理性的な分析と自省と改革を促していると考える。言い換えると、魯迅は社会科学に基づく中国変革を展望し、それを担うと想定される中国人の変革主体の「気質」の問題として(中国変革における第一動因として国民性を問題とするのではなく)²、国民性の問題を提起していると思われる。

そして魯迅は後期の雑文において、こうした自他を欺くような「気質」・態度を、南京国民政府の、支配層の欺瞞の問題でもあるとして指摘する。魯迅は「中国人失掉自信力了嗎」(1934・9・25、筆名公汗、『且介亭雜文』)で次のように指摘する。1931年9・18満州事変以来、中国では国際連盟にすがってきたが、それも失望に終わり、南京国民政府の上層部は国難を救うという名目によって、神仏にすぎる行事(「時輪金剛法会」、「仁王護国法会」等)を行うようになったという。

「中国人は現在〈自分を欺く力〉を発展させつつある。

〈自分を欺く〉ことも決して現在の新しいものではない、現在それが日にはっきりとして、一切を覆うようになったにすぎない。」(「中国人失掉自信力了嗎」)

ここで、魯迅は社会的な風潮のように神仏にすぎる行事を指摘しているけれども、明らかに、満州事変をめぐる南京国民政府の自他を欺く態度と政策を批判している。同じ自他を欺く態度にしる、その態度をとるものは南京国民政府の支配層である。

また、魯迅は「迎神和咬人」(1934・8・22、筆名越僑、『花邊文学』)で、次のような新聞の記事を紹介する。浙江省^{よしょう}余姚の或る村で、干ばつのために神への雨乞いが行われ、そのとき帽子をかぶった見物人が農民に乱打された。

それは、神への不敬に対する、艱難をともにしようとしなない者に対する農民の憎しみであったという。また、雨乞いを止めようとした60歳余りの国民党の老党員が、喉をかみ破られ殺されたという。農民たちはその極端な憎悪の行為によって、刑罰を免れることができると信じたとする。

「帝国〔清〕から民国になって以降、上層の改変は少なくない。しかし無教育の農民は、なんらの新しい有益なものを得ることがなく、依然として旧来の迷信であり、旧来の誤った知識であり、彼らは懸命に命を救い、死を逃れようとするなかで、その死を自ら速めている。」(「迎神和咬人」)

魯迅は、ここで、中華民国建国以来、無教育のまま放置されてきた農民の状態を指摘する。魯迅は、無教育に放置された農民を非難するのではなく、むしろ農民が干ばつによる死から逃れようとして、迷信と粗野な行為に走らざるをえない、その手段しかない農民の「悲劇」を指摘する。

この農民の行為は、前期の「愚民」としての行為と同質であると言える。しかし魯迅の批判の矛先は、農民に向いておらず、中華民国建国以来、農村への教育の普及を怠った支配層の責任に向いている。³

(2)「素朴な民」の存在

魯迅は、「写于深夜里」(1936・4・4、『且介亭雜文末編』)で次のように言う。

「このなかは〔ケーテ・コルヴィッツの版画集の内容を指す〕、困窮、疾病、飢餓、死亡である……もちろん抵抗と闘争もある、しかし比較的少ない。これはちょうど作者の自画像のように、その顔には憎悪と憤怒があるけれども、さらに多いのは慈愛と憐憫であるのと同じようだ。これはあらゆる『侮辱され損なわれた』者の母親における心の図像である。この類いの母親は、中国の指のつめをまだ赤く染めていない田舎にも、常にいる。しかし人はしばしば彼女をあざ笑って言う、母親というものはただ役に立たない息子だけを愛する。しかし私は、彼女は役に立つ息子も愛している、ただ強壯で能力があることから、彼女は安心して、『侮辱され損なわれた』子供に注意を向けるのだと思う。」(「写于深夜里」)

この慈愛に充ちた母親像は、中期の「我們現在怎樣做父親」（1919・10、『新青年』第6卷第6号、1919・11・1、筆名唐俟、『墳』）における「素朴な民」としての母親像を想起させる。

「自然界の摂理にも、欠点のあることは免れないけれども、老若を結合する方法には決して誤りはない。それは『恩』を採らずに、生物に一種の天性をあたえた。私たちはそれを『愛』と呼ぶ。（中略）

人類も例外ではなく、欧米の家庭はたいてい幼者弱者を基準としている。（中略）中国では『聖人の徒』の踏みつけをまだ経験したことのない、考え方に汚れなく純粋な人は、やはり自然にこの天性を発露することができる。例えば村の女が嬰兒に乳を与えているとき、決して自分が恩を施しているとは思えない。」「（『我們現在怎樣做父親』）



こうした前期の「素朴な民」を受け継ぐ、1930年代の「指のつめをまだ赤く染めていない」慈愛に充ちた母親の存在を、魯迅はおそらく当時の旧中国社会の郷村におい

「自画像」、『凱綏・珂勒惠支版画選集』、三閑書屋、1936（『魯迅編印画集輯存（1）』、上海人民美術出版社、1982・7）

て、事実として存在していると推定していたのだと思われる。

また、魯迅は「論秦理齋夫人事」（1934・5・24、筆名公汗、『花辺文学』）で次のように言う。秦理齋夫人は夫を病で亡くしたあと、子供の教育のために上海に留まろうとした。しかし無錫^{むしやく}の夫の実家の命令の圧力が強く、追い詰められて、三人の子供とともに自死した。そののち、夫人を責める世間の論調に対して、魯迅は夫人を弁護して言う。

「私たちはもとより奮闘ということで責めてはいけないのではない。しかし暗黒の呑みこむ力は、しばしば孤軍に勝り、まして自死の批判者は必ずしも戦闘の助力者ではない。彼らは他人が奮闘しているとき、抵抗しているとき、惨敗したとき、むしろ一言も発しなかったであろう。辺鄙な田舎或いは都会

のなかで、孤児や寡婦が、貧乏な女や労働者が、命令に従って死んだり、或いは命令に逆らい、結局は死なざるをえないものは限らない。しかしかつて誰の口に上り、誰の心を動かしたであろうか。」（「論秦理斎夫人事」）

「人はもとより生存しなければならない、しかしそれは進化のためである。苦しみを受けることもかまわない、しかしそれは将来のあらゆる苦しみを取りのぞくためである。さらには闘わなければならない、しかしそれは改革のためである。他人の自死を責める者は、人を責めながら、他方でまさしく人を自死の道に駆りたてる環境に対して挑戦し、攻撃しなければならない。もしも暗黒の主力に対して一言も述べることなく、一矢も発することなく、しかし〈弱者〉に対してはくどくどしく言うのであれば、たとい彼がいかに義憤を顔に表そうとも、私はこう言わざるをえない——私もまことにこらえきれない——彼は実際には殺人者の共犯者にすぎない、と。」（同上、傍点は省略）
ここに見られる旧社会の弱者に対する同情は、魯迅の中期の文学運動における旧社会の弱者に対する人道主義的同情と変わりが無い。魯迅は中期において、「主犯なき無意識のこの殺人集団」（「我之節烈観」、1918・7）のなかで、すなわち中国旧社会のなかで、抑圧される弱者幼者の運命に大きな同情を注いだ。「祝福」（1924・2・7、『彷徨』）においては、「素朴な民」祥林嫂が封建的社会における旧習の圧力のなかで破滅する姿が、同情をもって描かれた。

後期において魯迅は、旧社会の圧力に抗することができず、自死にまで追い詰められた弱者に同情している。こうした弱者に対して同情する人道主義的態度は後期にも一貫して継続していると言える。

しかしここでは、弱者に対する同情ばかりではなく、進歩的評論家（原文、「進歩的評論家」）等に対する批判が行われる。魯迅は、自死をえらんだ弱者を責める進歩的評論家等の存在を指摘する。進歩的評論家等は、暗黒の主力である旧社会に対して一言も抗議することなく、むしろ他方で弱者の自死を責める。このことから進歩的評論家等は、封建的社会という殺人者の共犯者にほかならないとする。すなわち後期の魯迅は、進歩的評論家等が本来批判すべき封建的抑圧者、暗黒の主力を批判せずに、被抑圧者の弱いことを、奮闘しないことを、その自死を、かえって批判することを取りあげる。魯迅は

こうした進歩的評論家等がむしろ殺人の共犯者であるとする。

それは、後期の魯迅がしばしば批判した「奴才」の精神（暗黒の現実と戦わず、むしろそこに麻痺し、逆に「奴隸」を鞭打とうとする奴隸監督としての「奴才」、この点については後述）の、進歩的評論家等における現れであると思われる。その「奴才」の精神に対して、魯迅は批判している。

「素朴な民」、弱者幼者の不幸を同じく取りあげるにしても、魯迅の批判の矛先は、中国旧社会の封建的抑圧者に向けられると同時に、この暗黒の主流を批判し戦うことをせず、その犠牲者を責める進歩的評論家等にも、その「奴才」の精神にも、向けられた。人道主義の実現には、現実の暗黒の主流と戦うことが必要とされた。

(3)『朝花夕拾』を受けつぐ故郷紹興の民衆像

魯迅は1936年において、『朝花夕拾』（北京未名社、1928・9、そのなかの大部分は1926年に執筆された）の体裁を受けつぐ作品を書き、故郷におけるありのままの民衆像と、青年時代における知識人像を語る。それらが、「我的第一個師父」（1936・4・1、『且介亭雜文末編』）、「女吊」（1936・9・19～20、『且介亭雜文末編』）、「関于太炎先生二三事」（1936・10・9、『且介亭雜文末編』）、「因太炎先生而想起的二三事」（1936・10・17、『且介亭雜文末編』）である。

魯迅は、「女吊」（前出）で明末の王思任の言葉、「会稽^{かいけい}は乃ち報讐^{ほうしゅう}雪辱^{せつじよく}の郷にして、藏垢納汚^{ぞうこうのうお}の地に非ず」を引用する。『朝花夕拾』（前出）での紹興の「無常^{むじよう}」鬼の紹介に続いて、ここでは紹興の、復讐性^{きこん}をもった女性の鬼魂^{きこん}「女吊^{じようよう}」を紹介する。女吊は女性の首つりをした鬼魂（亡魂）の意味である。農民労働者の演ずる「目連」の芝居のなかで、一人の女性が童養媳となってひどい虐待を受け、鬼魂となって復讐するために、ついに首つりをして「女吊」の鬼魂となる。しかし「女吊」はときには身代わりを求めて、復讐を忘れてしまう利己主義をもっているとする。村の女たちは、「女吊」が身代わりを求めることに反対するけれども、「女吊」が報復することを心配しない。「被压迫者は自分に報復の悪心がないとしても、自分が報復されるという心

配はまったくもたない。ただ明に暗に、人の血を吸い肉をくろう凶悪犯或いはその帮間人だけが、『犯されて校^{おか}わず』〔『論語』「泰伯第八」〕或いは『旧^{きゆう}悪^{あく}を念^{おも}わず』〔『論語』「公冶長」〕という格言を人に贈る。』（「女吊」）ここには、あるがままの故郷の民衆に対する親愛、「女吊」の鬼魂の復讐心に対する賛意と、民衆を食い物にしながら、復讐に反対する支配者像が述べられている。ここには『朝花夕拾』の場合と同じように、国民性の悪を体现する愚民の形象はない。

ここでは、『朝花夕拾』の場合と同様に、故郷紹興での幼年時代、少年時代を回顧し、そこに生き生きとした民衆や知識人（師父）のふるまい、生き方が描かれる。『朝花夕拾』の「阿長与『山海経』」（1926・3・10）の乳母阿長はしきたりや縁起かつぎの面倒な女性であつたけれども、語り手の渴望した『山海経』^{せんがいきよう}を買ってくれるという心優しさも描かれた。阿長と比較すれば、「女吊」の女性は、虐待を受ける最下層の弱者として、自死を選んで鬼魂となり、その復讐を図ろうとする会稽の民衆の意地・意志が見られる。最下層の弱者が、復讐という一種の戦う意思を示すものとして描かれる。

魯迅は日本留学時代に章太炎の講義を受けた。そのときの思い出が、「関于太炎先生二三事」（1936・10・9、前出）、「因太炎先生而想起的二三事」（1936・10・17、前出）で語られる。「関于太炎先生二三事」（前出）で次のように言う。

「講義を聴きに行ったのもこのときである。しかし決して彼が学者であるためではなく、彼が学問のある革命家であつたからである。だから今にいたるまで、先生の声や姿はなお目の前にある、しかし講義をされた『説文解字』のほうは、一言も覚えていない。」

「先の戦う〔章太炎の〕文章が補充収録されるのかどうか、知りようがない。戦う文章は、すなわち先生の一生の最大の、最も永くとどめるべき業績である。もしもそこに備わっていないのならば、一つ一つ収録し、校勘印刷し、先生と後生^{こうせい}の心を合わせて、戦闘者の心中に生かしていかなければならないと思う。」

ここに、革命家として戦う学者・知識人であつた章太炎を顕彰する気持ちが

うかがわれる。変革を求めて戦う章太炎の姿勢を強調する点が、後期の魯迅の姿勢における一つの特徴と思われる。

魯迅は、中期において、『個人的無治主義』と『人道主義』の起伏消長」（『魯迅景宋通信集』二四、1925・5・30）の一環として存在した民衆観から抜けでるころ、1926年に、あるがままの故郷紹興の民衆を回想し、自分の心の根にある、心の根でつながっている故郷のあるがままの民衆を回顧したと思われる。

そのころと同じように、1930年代、上海に蟄居し、上海から外にでることが難しく（1930年に、国民党浙江省党部から逮捕令の申請が出ていたこともある）、周囲に上海のいびつな類型の市民（後述）に取り囲まれているなかで、魯迅にとって、少年時代のあるがままの紹興の庶民のまっとうな暮らし、「目連」の芝居の体験、初めての師父としての和尚さんの生きざまやその姿、抑圧者虐待者に復讐を行おうとする「女吊」の鬼魂等、自分の心の根でつながる、こうしたまっとうな生き生きとした生活と心情をもつ民衆の姿は、魯迅の心の根の支えであったと推測する。⁴

注

¹ 1926年の三・一八惨案以後、魯迅は中国変革の当面する緊急の課題が、中国人の国民性の改革にあるのではなく、現実に国民性の悪を体現し圧制を実行する北洋軍閥政府の打倒、すなわち権力構造の変革にあると認識するようになった。また、北洋軍閥政府と結託する知識人に対する警戒を強めた。この経験は、1927年の四・一二クーデターの体験によっていっそう強められた可能性がある。

現実の反動的権力とそれに結託する知識人に対する警戒について、マルクス主義文芸理論を受容した後に、魯迅は「上海文芸之一瞥」（1931・7・20講演、『文芸新聞』第20期、21期、1931・7・27、8・3、『二心集』）で、次のように言う。

「惜しむらくは現在の作家は、革命的な作家や批評家でさえも、しばしば現実の社会を正視し、その仔細を知り、とりわけ敵の仔細を認識することができない、或いはそうする勇気ないのです。ついでに例を一つあげましょう、以前の『列寧青年〔レーニン青年〕』に中国文学界を評論する文章があり、それを三派に分けていました。第一に創造社で、無産階級文学派として最も長く論じ、その次は語絲派で、小資産階級文学として短く述べてあります。第三は新月派で、資本金階級文学派として、さらに短く述べ、一頁にもなりません。これは次のことを示します。この青年批評家は敵であると認識するものであればあるほど、ますます言うべきこともなく、すなわち仔細に見ていないのです。（中

略) もしも戦う者であるならば、革命と敵を理解するうえでは、むしろ当面の敵をより多く解剖しなければなりません。文学作品を書こうとするときも同じです。革命の実際を知らなければならぬだけでなく、深く敵の状況、現在の各方面の状況を知り、それから革命の前途を判断しなければなりません。」

² 本文の変革主体とは「新興の無産者」よりも広い範囲の労働者、農民、勤労市民を含めて想定して使用している。

³ 「上海所感」(1933・12・5、『集外集拾遺』、原文は日本語、「上海雑感」、『朝日新聞』、1934・1・1、『魯迅日文作品集』、上海文芸出版社、1981・5第1版、1993・5第2次印刷)で魯迅は次のように言う。(旧仮名遣いはそのままに、ルビを省略する。『魯迅日文作品集』からの引用は、この例に従う。以下同じ)

「『愚民』の発生は愚民政策の効目で、秦の始皇帝が死んでからも二千余年、歴史によれば再度その政策を繰返したものはなかったのである。しかしその効目の残ることは、なんて驚くべきほど長いのだらう。」

また、魯迅は「我談「墮民」」(『准風月談』、1933・7・3)で、故郷紹興の「墮民」の歴史的由来に触れたあと、中華民国のはじめ、魯迅の母が、故郷の家に出入りしていた「墮民」の女性に、「私たちは同じになったのだから、あなたがたは来る必要がなくなった」旨を伝えたところ、しかしその女性は「奴才」としての「権利」を主張したとする。この話は、民衆の中の「墮民」の地位に置かれてきた一部の民衆の心理と行動を述べたもので、前期における民衆の階層に現れる代表的民衆像の一つとしての「愚民」として指摘されたものではないと思われる。むしろ歴史的に実際に奴隷の境遇に置かれてきた「墮民」の民衆は、経済的社会的関係が実質的に変化することによってこそ、「墮民」という意識が変化するであろうことを、示唆していると思われる。

⁴ 『バスク牧歌調』(ピオ・パローハ〈1872-1956〉、魯迅訳)は、1928年から1934年の間に翻訳された。パローハは、魯迅翻訳の『バスク牧歌調』の諸作品の中で、スペインのバスク族の下層階層の民衆(知識人、小市民階層を含めて)の性格、彼らのまっとうな生活ぶりについて、描写する。その姿は、魯迅の故郷紹興のまっとうな生活をする民衆に対する共感(前期の『朝花夕拾』、また後期の「女吊」、「我的第一個師父」等における)と共通するところがあると感じられる。また、フランスの属領下にあるバスク族の悲哀を映しだすものでもあった作品も存在した。前期の『朝花夕拾』における民衆像と、晩年の「女吊」(1936・9・19-20)等の間隙をつなぐものとして、『バスク牧歌調』の民衆像の紹介があったと思われる。そうした点等について、「『バスク牧歌調』に関する覚え書(1)～(6)」(『中国文芸研究会会報』第423号(1)、2017・1・29、第424・425合併号(2)、2017・3・26、第426号(3)、2017・4・30、第427号(4)、2017・5・28、第429号(5)、2017・7・30、第430号(6)、2017・8・27)で述べたことがある。